

児童の援助要請行動を支援する教育相談

—相談できる児童・相談される教員になるために—

大尾千晶¹

問題と目的

今日の児童対象の学校教育相談の課題

小学校学習指導要領第1章総則（平成20年3月告示）では、学校の教育活動を進めるに当たり、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指すと示されている。「生きる力」について、神谷(2007)は「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」であると述べている。現在でも不登校児童生徒数や問題行動の数は依然として多く、児童の「生きる力」の弱さやコミュニケーション力の弱さは、教育現場で課題となっている。不登校やいじめなどの問題行動は、最初は些細なことから始まっても、児童自身や他児童からの訴えがないために発見が遅れ、放置しておくうちに自力解決が難しい状態になり、学校体制で介入しても解決困難な状態にまで発展することがある。児童自身の援助要請の力が弱いことや、周囲とのつながりの希薄さ等が要因となっている。また、事態が改善しても、根本（児童本人や周囲の考え方や姿勢）が変わっていないため、同じことを繰り返したり、似たような問題行動を起こしたりすることも多い。

佐藤・渡邊(2013)によると、公立小学校4～6年生739人対象の調査で、担任に「相談しやすい」と答えた児童の割合は43.5%であり、保護者80.3%、友達66.9%のそれと比べると低い。しかし、担任に相談した場合の勉強、健康の悩みの解決割合はそれぞれ95.0%と94.1%、友達関係の悩みの解決割合は83.6%と、保護者、友達に相談したときよりも解決割合が高いことも示している。これらのことから、担任に相談すれば問題の解決が図りやすいにも関わらず、児童が担任に相談していないのはなぜかという疑問が生まれてくる。

一方、コミュニケーション力の弱まりは、昨今の教員にも言える。コミュニケーションが苦手と言われる現代の若者が、数年すれば現場の教員になる。ベテラン教員も、現代の子どもたちの変化に対応できず、苦労した経験を持つ者が多い。河村(2003)は、最近、子どもたちの気持ちが理解できない、対応しきれないと悩み、休職したり退職したりする教師が増えていると述べ、悩む教員を、①子どもたちの実態の理解が適切ではない、②子どもたちの実態の理解は的確にできているが、自分の思いを子どもたちが理解できるような言葉や態度に置き換えていない、③子どもたちの実態の理解もでき、子どもたちに理解できるような言葉や態度にも置き換えているが、適切に伝えられていないという3つのタイプに分類している。目の前の児童としっかり向き合い、問題に気づき対応

¹ 府中町立府中小学校 教諭

する力が弱いと、児童との信頼関係が深まらず、問題の早期対応が遅れる場合がある。また、時間に追われてゆとりがなく、学級経営や個人対応の具体的なノウハウを教員同士が互いに伝えにくい現状がある。教員のチームワークも、意図的に作らなければ成り立ちにくくなっている。つまり、児童は生きる力が弱く、教員も児童の問題に気づき対応する力が弱いことで、児童は先生に相談しない、教員は児童のことが見えず、見ても対応しきれないという双方向からの課題があると思われる。

所属校の現状

筆者の所属校は今年度、生徒指導実践指定校の指定を受けている。生徒指導部の中に「教育相談」を位置づけ、児童や保護者に対応したり、関係諸機関との連携を図ったりしている。しかし、「教育相談」に特化した校内研修は少なく、教職員が共通認識を持った教育活動となっていない。そのため、日々の教育相談場面での対応が学級担任や学年部主任になりがちで、児童や保護者に不信感を抱かせてしまうこともある。思い通りにならないと教室を飛び出す児童や、不登校傾向の児童も増えつつあり、児童自身も自ら課題に向き合い、問題を解決するために行動しようとする姿勢が弱い傾向がある。児童の悩みや課題をどのように理解し、児童や保護者をどう支援していけばよいかに悩む教職員も少なくない。

本研究の目的

本研究では、「友人関係の悩み」についての児童の援助要請行動に焦点を当て、児童側と教員側から教育相談の課題を探る。まず、小学校4～6学年児童と教員を対象としたアンケートを実施し、児童が担任に相談しない理由を明らかにする（研究1）。また、教員は児童が相談しない理由をどのように考え、どのような工夫をしながら日々の教育相談を行っているかを調査する（研究2）。それらの調査結果をもとに、児童の援助要請行動に関わる教育相談の改善点を明らかにし、児童・教員双方向のつながりや歩み寄りを生み出し、学校全体の教育相談の機能を向上させる取組はどうあるべきかを模索することを、本研究の目的とする。

研究1

目的

児童アンケートで、児童の友人関係の悩みに関わる援助要請行動の実態調査を行い、担任に「相談しない」理由を探り、児童側から援助要請しにくい原因を明らかにする。

方法

調査対象者 所属校4～6年生児童418名、協力校4～6年生児童377名、計795名（男子405名、女子390名）

調査手続き 平成27年11月18日に調査用紙を配布し、1週間の回答期間の後、回収した。

調査内容 以下の5項目について、質問紙調査を行った。

問1 フェイス項目（学年、性別）

問2 友人関係に関わる悩みの解決法

問3 友人関係の悩みを抱えた時の援助資源（いじめの初期段階と思われる具体的な場面と児童

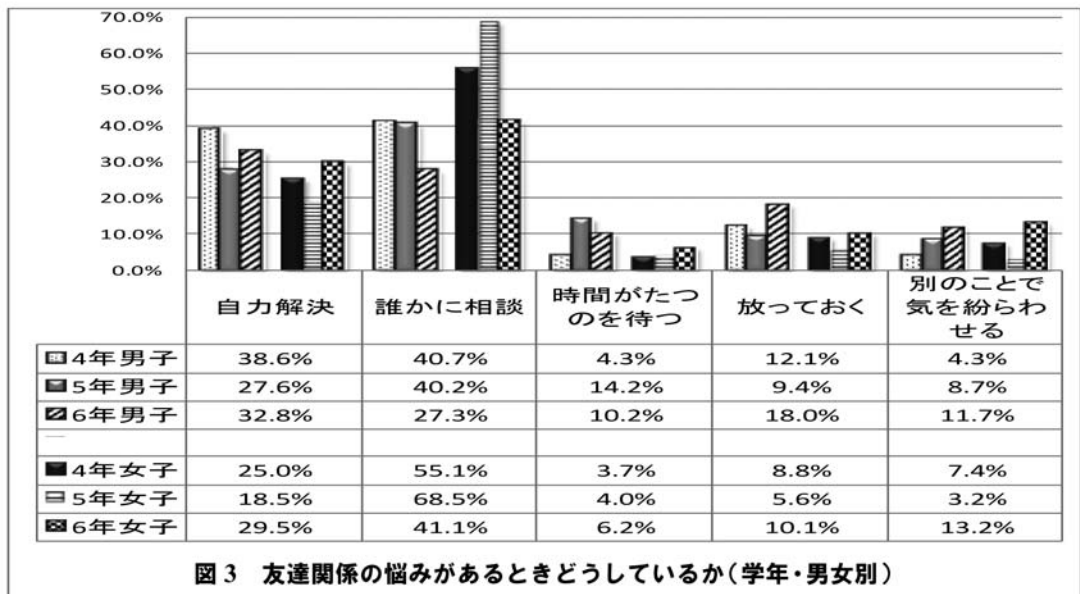
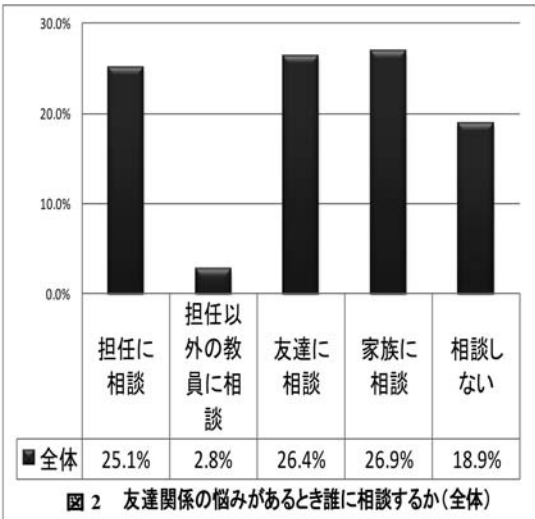
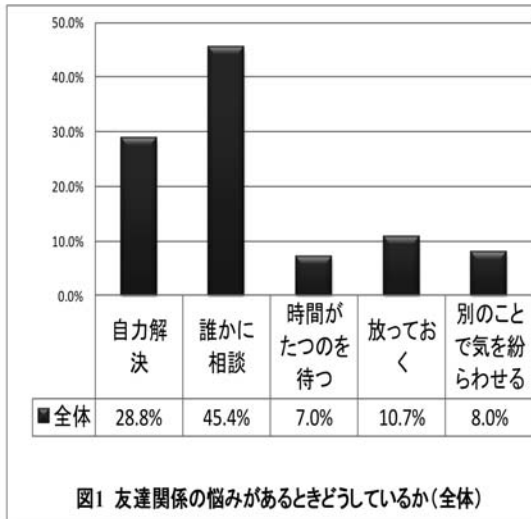
の行動を想定)

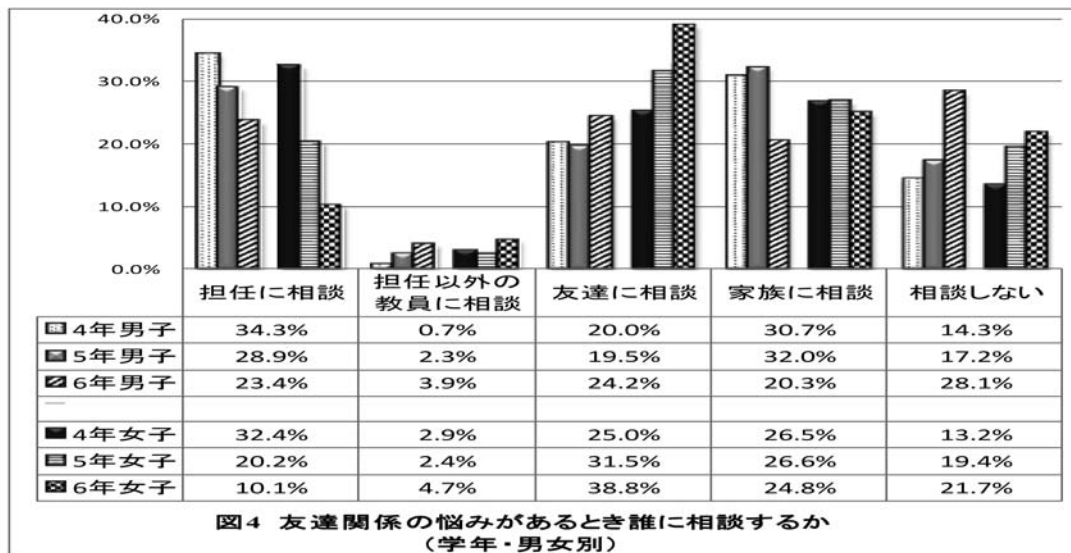
場面設定「あなたはこのごろ、何人かの子たちから、悪口を言われたり、たたかれたりしています。あなたは、それをやめてもらうことができいていません。今日は、その子たちから、いつもよりひどい悪口を言われました。そのすぐ後、担任の先生が通りかかりました。先生は、あなたがいやなことをされたのに気づいていないようです。」

問4 担任に相談しない理由【11項目4件法】

問5 より相談しやすくなるために担任に求めること【複数回答可，自由記述欄あり】

結果





友人関係に関わる悩みの解決法

普段の生活で友人関係の悩みを「誰かに相談している」(45.4%)、「自力解決する」(28.8%)と答えた児童が多かった。25.8%の児童は、「時間がたつのを待つ」「放っておく」「別のことで気を紛らわせる」など、問題解決に向けての直接的な行動を起こしていなかった(図1)。男子はどの学年でも相談行動をとらないと答えた割合が女子よりも高く、女子はどの学年も4割以上が誰かに相談すると答えていた。学年別に見ると、4、5年生女子の援助要請行動の割合は5割以上であったが、6年生女子では低くなっていた(41.1%)。6年生男子では、相談するよりも自力で解決しようとする割合が最も高かった(32.8%)(図3)。

友人関係の悩みを抱えた時の援助資源

児童が嫌がらせを受ける場面を想定し、その後の援助要請を誰に対して行うかを複数の回答選択肢から1つ選ぶ方法で回答を求めた。

全体では「家族に相談する」(26.9%)、「友達に相談する」(26.4%)、「担任に相談する」(25.1%)、「担任以外に相談する」(2.8%)であり、友人関係の悩みについて、家族、友達、教員に相談する割合はほぼ同率であった。いじめの初期段階と考えられる場面でも、相談しない児童が約2割みられた(図2)。各学年における援助資源の上位3位は、4年生では①担任、②家族、③友達、5年生では①家族、②友達、③担任、6年生では①友達、②相談しない、③家族となった。担任に相談する割合の順位が下がり、6年生全体では3位までに入っていなかった。担任に相談する割合は、特に6年生女子で少なく10.1%であった。6年生男子は「誰にも相談しない」を選んだ割合が最も高かった(28.1%)(図4)。

担任に相談しない理由

問3で「担任以外の援助資源を求める」、または「相談しない」と答えた児童に、その理由について11項目4件法で回答を求めた。

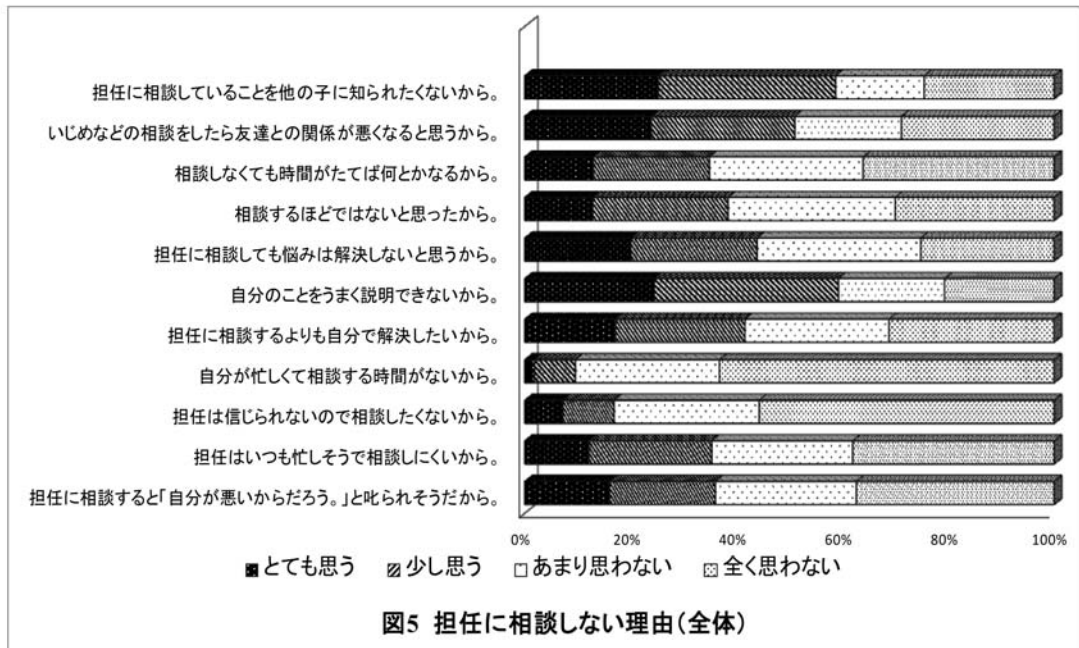


図5 担任に相談しない理由(全体)

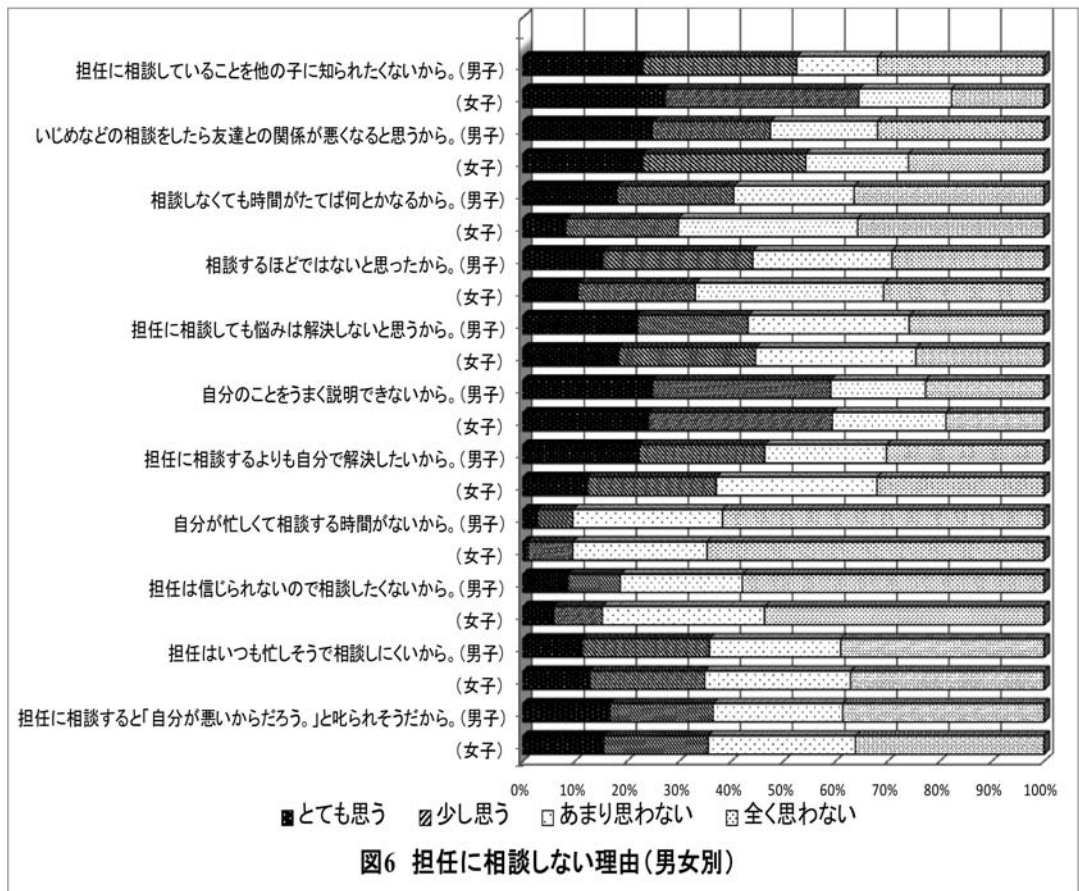
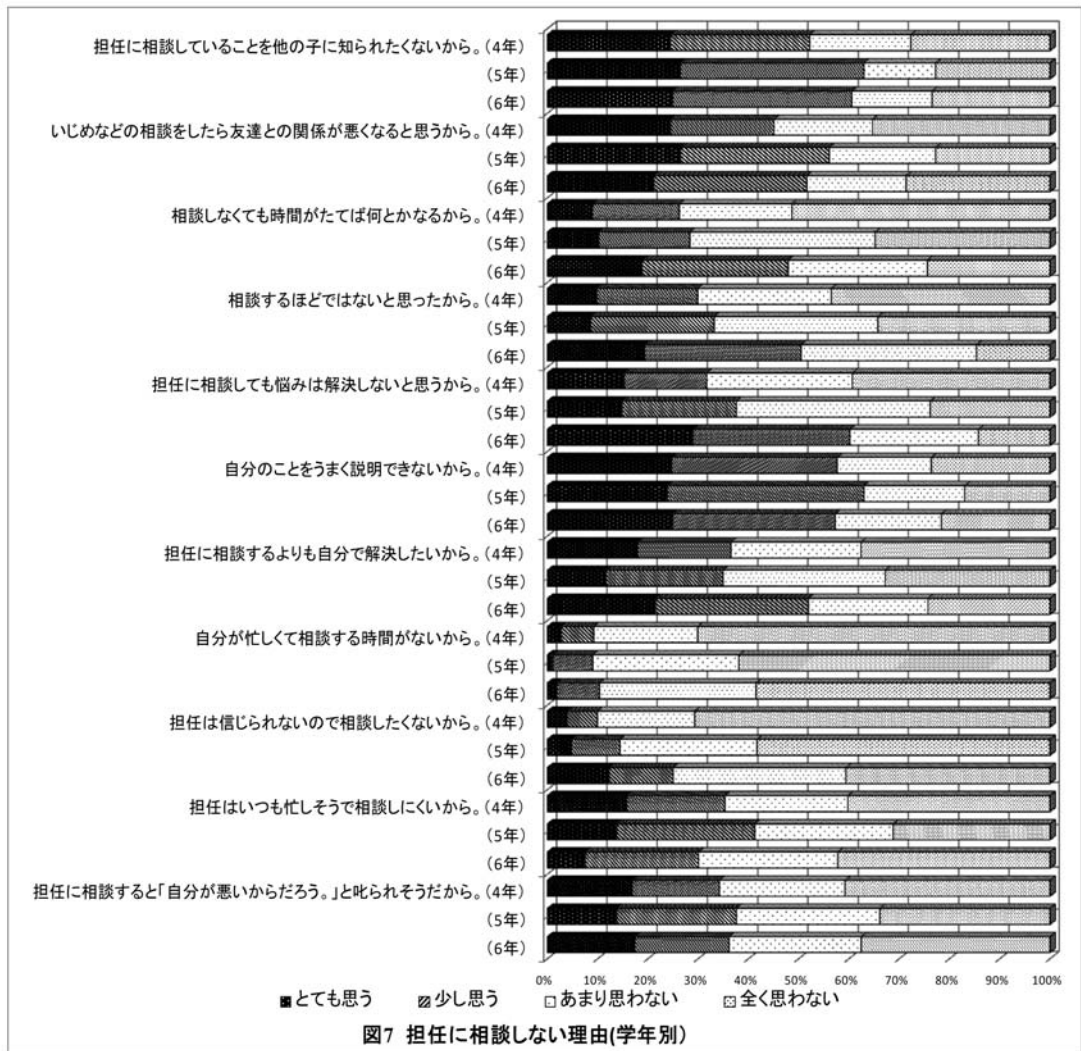


図6 担任に相談しない理由(男女別)



「自分のことをうまく説明できないから」(59.3%)、「担任に相談していることを他の子に知られたくないから」(59.2%)、「いじめなどの相談をしたら友達との関係が悪くなると思うから」(51.0%)という理由は、過半数が「思う」と答えていた。「担任に相談すると『自分が悪いからだろう』と叱られそうだから」(36.0%)、「担任はいつも忙しそうで相談しにくいから」(35.3%)という結果から、3割以上の児童が「相談しにくい雰囲気や態度」を担任に感じる事が示された(図5)。

男女別では、全体で割合が高かった「自分のことをうまく説明できないから」という理由以上に、女子は「相談していることを他の子に知られたくないから」(64.5%)が高かった。男子は自力解決だけでなく、相談しなくても何とかなると思う割合と、担任不信の割合が女子より高かった(図6)。

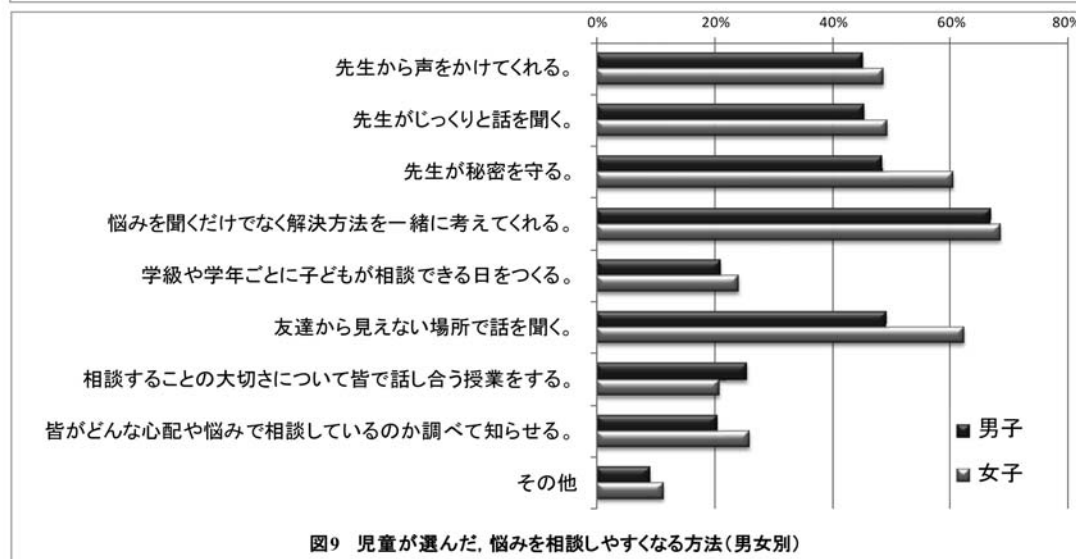
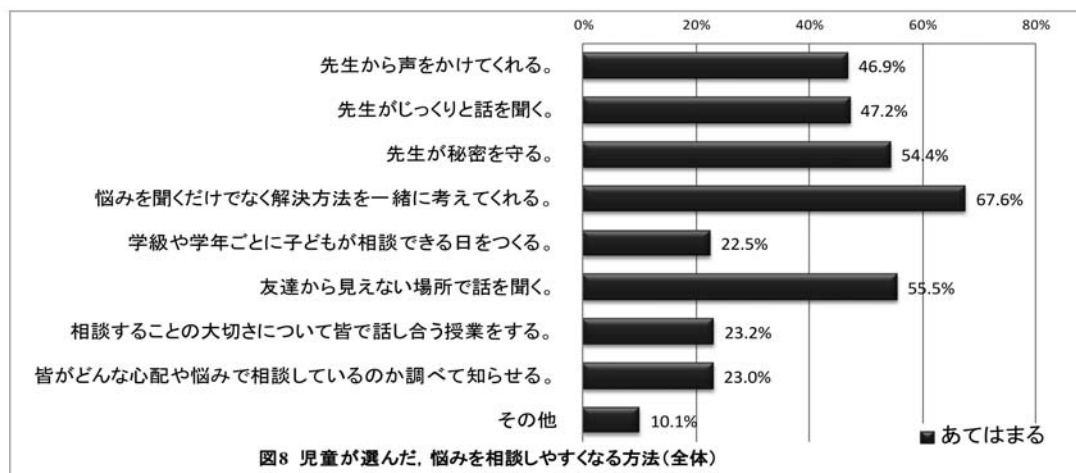
学年別にみると、「自分のことをうまく説明できないから」は、学年が上がるにつれて「思う」と答えた児童が減っていた。「担任に相談していることを他の子に知られたくないから」は、どの学年でも割合が高く、5、6年生では理由の1位となっていた。「いじめなどの相談をしたら友達との関

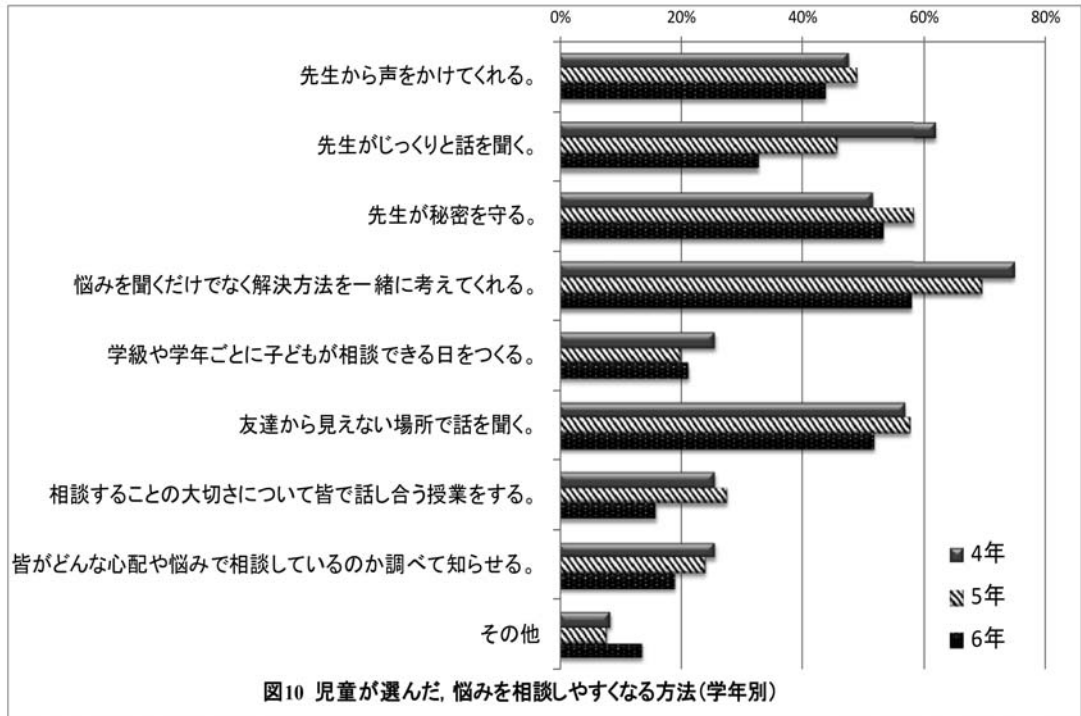
係が悪くなると思うから」はどの学年も5割を超える児童が「思う」と答えたが、6年生だけは「担任に相談しても悩みは解決しないと思うから」の割合の方が高かった。他にも、6年生では「相談しなくても時間がたてば何とかなるから」、「相談するほどではないと思ったから」、「担任に相談するよりも自分で解決したいから」という理由が、他学年よりも10%以上多かった(図7)。

児童が悩みを相談しやすくなる方法

自由記述欄を含む9つの選択肢の中から該当するものを全てを回答させた。

全体でみると、「悩みを聞くだけでなく解決方法を一緒に考えてくれる」(67.6%)、「友達から見えない場所で話を聞く」(55.5%)、「先生が秘密を守る」(54.4%)と続いた(図8)。男女差が比較的大きかったのは、「友達から見えない場所で話を聞く」、「先生が秘密を守る」で、いずれも女子の方が多かった(図9)。学年別でも、「解決方法を一緒に考えてくれる」が最も高かったが、その割合は学年が進むにつれて減っていた。特に学年差が大きかったのは、「先生がじっくり話を聞く」で、4年生では62.0%の児童が選んでいたが、5年生45.8%、6年生32.8%と大きく減っていた(図10)。





考察

研究1では、児童の友人関係の悩みに関わる援助要請行動の実態調査を行い、担任に「相談しない」理由を探り、児童側から担任に援助要請しにくい原因を明らかにした。

まず、普段悩みがあるときの解決法を回答させた(問2)。約半数の児童が友達関係の悩みを「誰かに相談」していると答え、約4分の1の児童は問題解決に向けた直接的な行動を起こしていなかった。男子の方が女子よりも自力で解決しようとする傾向が強く、時間がたつのを待ったり放っておいたりする割合も高いことが示された。普段の友人関係の悩みは54.6%の児童が相談以外の解決法を選んでしたが、問3の具体的な問題場面で「相談しない」と答えた児童は18.9%であった。この差は、相談するのがよいことは分かっているが、実際の援助要請行動は普段あまりとれていないことが示されたものと考えられる。

援助資源の選択(問3)では、性差や学年差がみられた。学年が上がるにつれ、担任や家族に相談する割合が減り、友達に相談する割合や誰にも相談しない割合が増えていた。特に女子では、友達に相談する割合の増加と、担任に相談する割合の減少が顕著であった。担任に相談する割合は学年を追うごとに下がり、6年生では3位までに入っておらず、約4分の1の6年生が「相談しない」と答えていた。児童期から思春期へと移行する発達段階にある6年生児童の実態が明らかになった。このことは、後藤・廣岡(2005)が中学生を対象とした研究の中で、人間関係に関わる深刻な悩みについて、中学生の相談抵抗が高いのは親と教員であると報告していることと一致する。小学校高学年の教育相談にあたる教員は、6年生は中学生の心情に近いとの認識をもちながら、教育相談に

当たらなければならない。

児童が担任に相談しない理由（問4）では、「自分のことをうまく説明できないから」と「担任に相談していることを他の子に知られたくないから」に、約6割の児童が「思う」と答えた。友人関係の悪化への心配が最も高いであろうという調査前の予想と異なり、自己理解や自己表現への自信のなさが最も高い理由となっていた。これについては、教員のコーチングスキル向上や児童への社会的スキル教育が、現代の教育相談に必要な手立てであると考えられる。周囲と違う行動をとっていることを「他の子に知られる不安」も大きいと考えられる。相談していることを知られると、悪意がなくても何を相談したのか聞かれたり、「チクった」と言われたりする可能性があるからであろう。相談する児童が嫌な思いをしないよう、話すタイミングや場所に配慮しなければならない。担任に相談しても解決しないと考えている児童は約4割おり、主な理由として、「はじめから解決をあきらめている」、「担任に力がないと思っている」という2つが考えられる。「担任は信じられないので相談したくないから」（16.9%）や、「担任に相談すると『自分が悪いからだろう』としかられそうだから」（36.0%）で「思う」と答えた割合からみると、担任に力がないとはあまり思っていないが、担任に相談すると自分の落ち度を指摘され、肝心の悩みは解決しないと考える児童は少なくないと思われる。「担任が忙しそうで相談しにくい」と答えた児童も35.3%おり、4割近い児童が担任に「相談しにくい雰囲気や態度」を感じていると推察される。

児童が担任に望む教育相談の工夫や配慮（問5）においては、「悩みを聞くだけでなく解決方法を一緒に考えてくれる」（67.6%）が最も多く、次いで「友達から見えない場所で話を聞く」（55.5%）、「先生が秘密を守る」（54.4%）と続いた。多くの児童が、相談することで解決方法を見出すことを望んでいることが示された。また、相談していることや、その内容を周囲に知られたくないと思う児童が多いことがわかった。「解決方法を一緒に考えてくれる」、「先生がじっくり話を聞く」を望む割合は、学年が進むにつれて減っていた。成長とともに自力解決を望む割合が高くなることとの関連が考えられる。「その他」の内容記述の中に、「そこまで時間をかけずに話す」、「無理に深く聞こうとしない」、「あまり間に入らず自分たちで解決できるように見守る」、「相手としっかり話し合いをさせてくれる」、「無理やり仲直りするよう押し進めるのをやめる」という意見があったことから、児童が望んでいないのに教員が時間に制限なく深く立ち入ったり、教員が望む児童の姿に近づけることを解決策としたりするような教育相談は、自立心や大人への反発心が育ってくる高学年児童の援助要請行動を減少させる一因とも言えるであろう。児童が「長い」と感じるほど時間をかけて深い内容を聴かれるのは、自己表現が苦手な児童や反発心が育ってきた児童にとり好ましいことではないため、よほど困った事態でない限り担任に相談するのは避けたいという思いと行動は、発達段階が進むにつれて顕著になると推察される。

「友達から見えない場所で話を聞く」、「先生が秘密を守る」を選ぶ女子が多く、女子は男子よりも援助要請が周囲に知られないような配慮を望む気持ちが強いと推測される。「相談日や授業の設定」は、4、5年生は約4分の1の児童が選んだが、6年生で選んだ児童は少なかった。しかし、普段は約半数の児童が援助要請していない実態を踏まえると、児童の援助要請行動を支援し問題に向き合う姿勢を育てるためには、たとえ児童の希望は少なくても、相談日を設定したり、相談するこ

との意義を伝える授業を行ったりする必要性はあると思われる。

研究 2

目的

教員アンケートで、児童が担任に相談しない理由についての教員側の考えを明らかにし、児童の思いと比較・分析する。

方法

調査対象者 所属校教職員 26 名，協力校教職員 24 名（管理職，養護教諭を含む），計 50 名

調査手続き 平成 27 年 11 月 18 日に調査用紙を配布し，2 週間の回答期間の後，回収した。

調査内容 以下の 4 項目について，質問紙調査を行った。

問 1 児童が担任に相談しない理由についての考え（研究 1 の児童アンケート問 3 と同内容の具体的場面から児童の思いを想定）【11 項目 4 件法】

問 2 児童が相談しやすくするために気をつけていること【15 項目 4 件法】

問 3 フェイス項目（担任か担任外か，性別，教員経験年数）

結果

所属校・協力校教職員 50 名から回答が得られた。このうち無効回答者数は，フェイス項目が 1 名，問 1-3 が 1 名，問 2-1-5 が 1 名であった。

フェイス項目

対象者のうち 76%が学級担任であり，24%が管理職，専科，養護教諭であった。また，対象者の 63%が女性であった。教員経験年数で見ると，1～10 年の対象者 34%，11～20 年の対象者 8%，21 年以上の対象者 57%と二極化が見られ，21 年以上の対象者は半数以上を占めていた。

児童が担任に相談しない理由についての考え

研究 1 の児童アンケート問 3 と同内容のいじめの初期段階と思われる具体的場면을提示し，そこから推察される「相談しない」児童の思いについて 11 項目 4 件法で回答を求めた。

児童が担任に相談しない理由の推察では，「担任に相談していることを他の子に知られたくない」（94%），「相談をしたら友達との関係が悪くなると思う」（90%），「自分のことをうまく説明できない」（84%）という順に割合が高かった。反対に，「相談するほどではないと思った」（8%），「自分がいそがしくて相談する時間がない」（14%），「担任に相談するよりも自分で解決したい」（16%）は割合が低く，これら 3 つの理由を児童はあまり思っていないと推察していた（図 13）。

児童アンケート問 4「相談しない理由」で「思う」と答えた児童の割合と，教員が「児童が思っているだろう」と推察した割合の順位と比較では，児童と教員が考える理由上位 3 位が一致した（表 1）。一方，下位 3 位では，「自分がいそがしくて相談する時間がない」は，児童と教員ともに順位が低かったが，他の 2 つは一致しなかった。「担任に相談するよりも自分で解決したい」，「相談するほ

どではないと思った」という理由で「思う」と答えた児童の割合は教員の推察よりも高く、「担任は信じられないので相談したくない」、「担任はいつもいそがしそうで相談しにくい」という理由は、教員の推察よりも低かった。

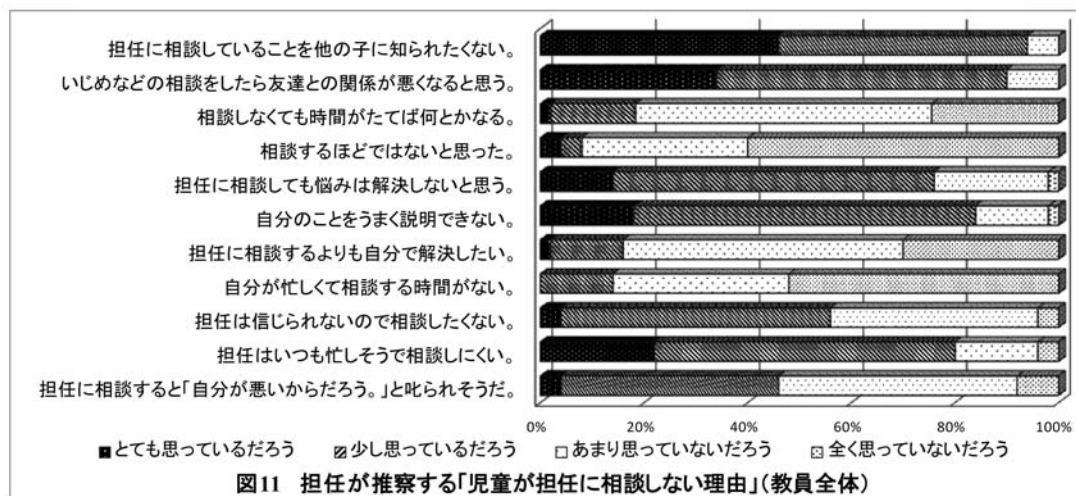


表1 児童が選んだ「担任に相談しない理由」と教員が選んだ「理由の推察」の順位比較

児童が相談しない理由	思っている と答えた児童の 割合の順位	思っているだ ろうと予想し た教員の割 合の順位
自分のことをうまく説明できない。	1	3
担任に相談していることを他の子に知られたくない。	2	1
いじめなどの相談をしたら友達との関係が悪くなると思う。	3	2
担任に相談しても悩みは解決しないと思う。	4	5
担任に相談するよりも自分で解決したい。	5	9
相談するほどではないと思った。	6	11
担任に相談すると「自分が悪いからだろう。」と叱られそうだ。	7	7
担任はいつも忙しそうで相談しにくい。	8	4
相談しなくても時間がたてば何とかなる。	9	8
担任は信じられないので相談したくない。	10	6
自分が忙しくて相談する時間がない。	11	10

表2 児童が担任に相談しやすくするために気をつけていること

児童が担任に相談しやすくなるために気をつけていること(教員全体)	とても気 をつけて いる	少し気 をつけて いる	あまり気 をつけて いない	ほとんど 気をつ けていな い	平均値	標準偏差
<日頃から気をつけていること>						
1-1 できるだけ多くの児童と話す。	48.0%	50.0%	2.0%	0.0%	3.5	0.54
1-2 児童の様子をよく観察し、気になる児童には声をかける。	72.0%	28.0%	0.0%	0.0%	3.7	0.45
1-3 担任に相談することの重要性や利点について学級全体に話す。	38.0%	42.0%	18.0%	2.0%	3.2	0.79
1-4 児童が話しやすいタイミングを選んで呼び出す。	38.0%	52.0%	10.0%	0.0%	3.3	0.64
1-5 「今は授業が優先か、面談が優先か。」などの優先順位を考える。	46.9%	38.8%	10.2%	4.1%	3.3	0.82
<個別の教育相談で気をつけていること>						
2-1 教員が複数で対応するようにしている。	54.0%	28.0%	12.0%	6.0%	3.3	0.91
2-2 密室で児童と二人きりにならないようにしている。	54.0%	34.0%	6.0%	6.0%	3.4	0.85
2-3 図やキーワードをかきながら話すなど児童が理解しやすくしている。	30.0%	52.0%	12.0%	6.0%	3.1	0.82
2-4 児童が話しやすい座席の配置にしている。	36.0%	46.0%	16.0%	2.0%	3.2	0.77
2-5 他の児童が内容を聞かないように場所を工夫している。	62.0%	34.0%	4.0%	0.0%	3.6	0.57
2-6 児童が話しやすい雰囲気や表情を意識している。	52.0%	46.0%	2.0%	0.0%	3.5	0.54
2-7 傾聴する(最後まで聞く)。	62.0%	32.0%	6.0%	0.0%	3.6	0.61
2-8 聴くだけでなく解決策を示す。	52.0%	42.0%	6.0%	0.0%	3.5	0.61
2-9 児童を否定する言葉をつかわない。	36.0%	52.0%	12.0%	0.0%	3.2	0.66
2-10 開始時刻や終了時刻などの時間設定を伝える。	8.0%	34.0%	38.0%	20.0%	2.3	0.89

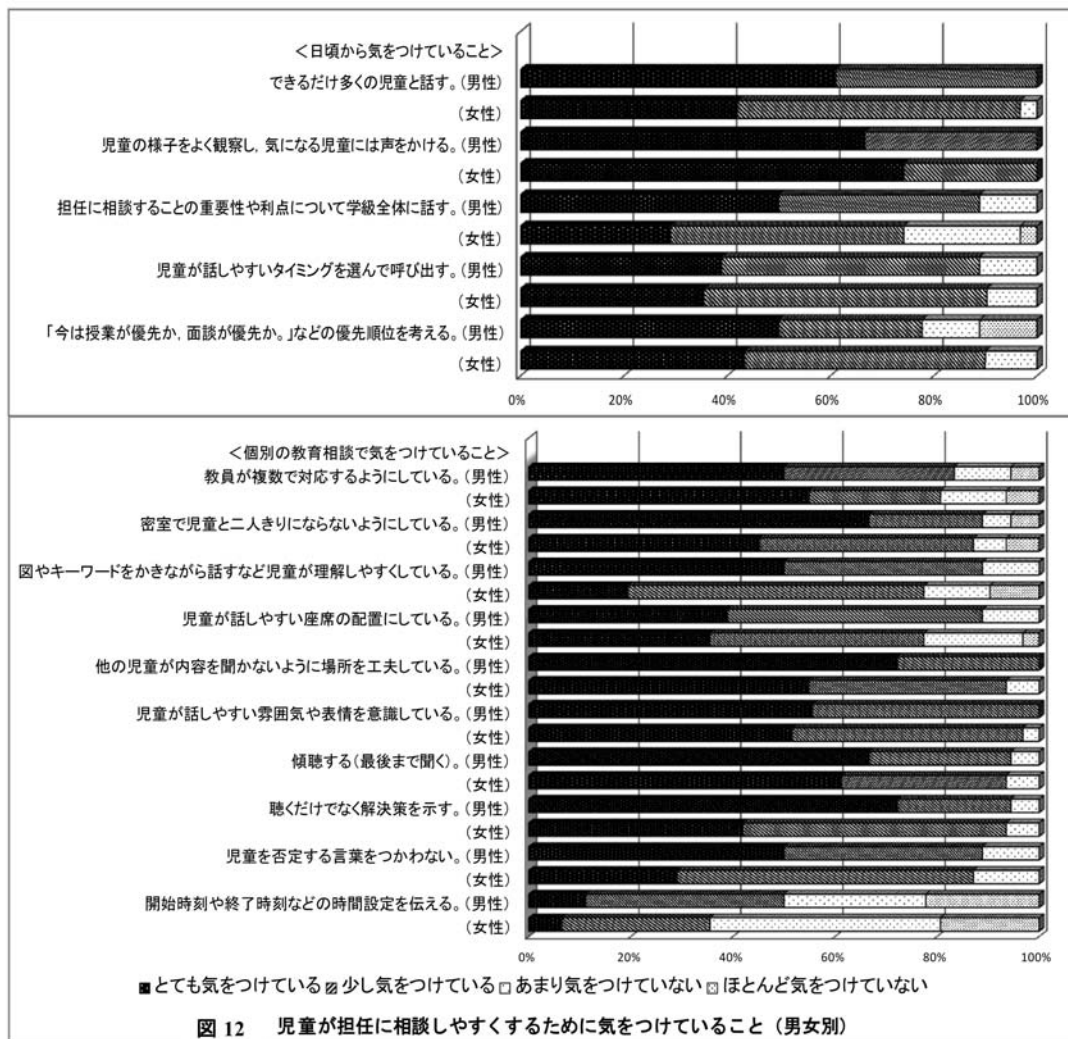


図 12 児童が担任に相談しやすくするために気をつけていること(男女別)

「児童が担任に個別に相談しやすくするために気をつけていること」について

1-2「児童の様子をよく観察し、気になる児童には声をかける」、1-1「できるだけ多くの児童と話す」は意識している教員が98%以上で、回答のばらつきも少なかった(表2)。1-3「担任に相談することの重要性や利点について学級全体に話す」は、2割程度の教員があまり意識していなかった。個別の教育相談では、2-6「児童が話しやすい雰囲気や表情を意識している」、2-5「他の児童が内容を聞かないように場所を工夫している」、2-7「傾聴する」は意識している教員が95%以上で、平均値も高かった。2-10「開始時刻や終了時刻などの時間設定を伝える」ことは約5割、2-3「図やキーワードをかきながら話すなど児童が理解しやすくしている」は約2割の教員が、あまり気をつけていなかった。男女別では、1-2「担任に相談することの重要性や利点について学級全体に話す」は、9割近い男性教員が気をつけているのに対し、女性教員は74.2%であった。逆に9割の女性教員が気をつけている『「今は授業が優先か、面談が優先か。」などの優先順位を考える』は、男性では77.8%であった。10%以上の男女差が見られたのは、2-3「図やキーワードをかきながら話すなど児童が理

解しやすくしている」、2-6「児童が話しやすい座席の配置にしている」、2-10「開始時刻や終了時刻などの時間設定を伝える」で、いずれも男性教員の方が気をつけていると答えた割合が高かった。

児童アンケート問5「児童が悩みを相談しやすくなる方法」と教員アンケート問2の比較

児童が望む相談しやすくなる方法の上位3項目と、教員が気をつけている関連項目の割合とを比較した。①「聴くだけでなく解決方法を一緒に考えてくれる」（児童 67.6%）に対し「聴くだけでなく解決策を示す」（教員 94.0%）、②「友達から見えない場所で話を聞く」（児童 55.5%）、③「先生が秘密を守る」（児童 54.4%）に対し「他の児童が内容を聞かないように場所を工夫している」（教員 96.0%）であった。

児童アンケート問5「その他」の内容記述欄に書かれた児童の意見と関連する、教員アンケート問2の結果を比較した。内容記述欄には70名の児童が回答しており、これらを7つのカテゴリに分類した（表3）。「担任の態度や指導内容（相談時）」、「担任の態度や指導内容（日常）」、「相談（話し合い）の形態」の順に記述が多かった。「担任の態度（相談時）」については、「笑顔でやさしく何でも聞く」、「相談者を否定しない」などから、担任のカウンセリング・マインドを求めていることが窺えた。「指導内容（相談時）」は、「いじめた児童にしっかり話を聞く」、「いけないことはいけないと、いじめた児童をしっかり叱る」、「仲直りするよう無理やり押し進めない」、「保護者にも一緒に考えてもらう」など、毅然とした指導を求める反面、一方的な指導にならないよう配慮を求める記述もみられた。「担任の態度（日常）」については「先生が待っていて子どもが自分から言う」、「いつも気にかける。自分で解決させる。喧嘩になっても話を聞くだけで、殴り合いになると止めに入る」、「先生が見ていてだめだと思ったら声をかければいい」、「あまり間に入らず自分たちで解決できるように見守る」など、まずは様子を見守り、児童自らが行動を起こすのを待つなどの自力解決への支援を望むと同時に、タイムリーな介入も求めている。「相談（話し合い）の形態」は、「先生と二人だと話さずらいので、仲の良い友達や同じ悩みを持つ友達、トラブルの相手を含めた話し合いをする」など、グループ面談を望む内容の記述が同カテゴリの14名中10名に見られた。

表3 児童アンケート問5「その他」記述内容

カテゴリ	度数	主な記述内容
担任の態度、指導内容（相談時）	21	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔でやさしく何でも聞く。 ・無理に深く聞こうとしない。 ・上の立場を使う怒り方をやめる。 ・途中で口をはさまず、話を理解する。 ・相談者を否定しない。
		<ul style="list-style-type: none"> ・いじめた児童にしっかり話を聞く。 ・いけないことはいけないと、いじめた児童をしっかり叱る。 ・仲直りするよう、無理やり押し進めない。 ・保護者にも一緒に考えてもらう。
担任の態度、指導内容（日常）	15	<ul style="list-style-type: none"> ・いつも児童を見守り、一人一人とコミュニケーションを取る。 ・先生が気づき、自力解決が無理だと思ったら声をかける。 ・悩みを聞いた後、特別扱いせず皆と同じように接する。
相談（話し合い）の形態	14	<ul style="list-style-type: none"> ・先生と二人だと話さずらいので、仲の良い友達や同じ悩みを持つ友達、トラブルの相手を含めた話し合いをする。
個人情報への配慮	8	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ加害者を叱る時、「〇〇さんから相談がきました。」と言ってほしくない。 ・情報をクラスに流さず、先生の心の中にとどめておく。
時間・場所の設定	6	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の時間に関係なく相談したい。 ・いじめている人のいない所か、その人が帰ってから相談する。 ・そこまで時間をかけずに話す。
日常の場の工夫	3	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日帰りに今日あったことを聞く時間を作る。 ・毎日5人ぐらいに「どんなことでなやんでいるの」と聞く。
相談日や授業の設定	3	<ul style="list-style-type: none"> ・「いじめ」についての授業時間をもう少し増やす。 ・いじめている人の名前を言うのではなく学年・学級の全員で話をする。

考察

研究2では、教員アンケートで、児童が担任に相談しない理由についての教員側の考えを明らかにし、教員側から児童が援助要請しない原因を分析した。

児童と教員が考える理由上位3位は一致し、教員が推察する「児童が担任に相談しない理由」は、ほぼ当たっていることが示された。ただし、児童は「自分のことをうまく説明できない」が最も高く、教員の推察では「相談していることを他の子に知られたくない」が最も高いというずれが見られた。「担任に相談するよりも自分で解決したい」、「相談するほどではないと思った」、「担任は信じられないので相談したくない」、「担任はいつも忙しそうで相談しにくい」は、児童の順位と教員の推察の順位にかなりの差が見られた。教員が考えるよりも児童は友人関係の問題を楽観的にとらえており、教員への不信感や多忙な様子は教員が思うほど気にしていなかった。

次に「児童が担任に相談しやすくするために気をつけていること」では、全教員が児童の様子を観察し、気になる児童への声かけをしていると答え、よく気をつけている女性教員の割合が高かった。できるだけ多くの児童と話すよう気をつけている教員が98%で、多くの教員が日頃から児童の様子や変化を掴むよう心がけていることが示された。しかし、担任に相談することの重要性や利点についての学級指導は、2割程度の教員が気をつけておらず、男性教員の方が気をつけている割合は高かった。男女差が見られた理由として、男性教員は高学年を担当する機会が多く、児童の友人関係の問題も複雑であることから、学級全体の指導への意識が高いと推測される。一方、女性教員は低学年を担当する割合が高いことから、個々の児童の様子をよく観察することで児童の問題に気づき、対応していると思われる。低学年では学級全体への指導よりも、個々への配慮や指導の占める割合の方が大きくなっていると考えられる。この男女の特性を生かし、互いの工夫について情報交換し協力することが、学校教育相談において有用であろう。個別の教育相談において、児童が話しやすい雰囲気や表情への配慮、他の児童が相談内容を聞かないような場所の工夫や傾聴は、ほとんどの教員が気をつけていた。多くの教員が守秘義務に注意を払い、児童が話しやすいよう「ペーシング」、「傾聴」などのカウンセリングやコーチングのスキルを生かして相談にあたっていることが示された。しかし、時間設定を伝えることや、図やキーワードを示すなど児童が理解しやすい工夫をすることは、約2割の教員があまり気をつけていなかった。教員が終了時刻や面談時間の長さに配慮せず個別に傾聴している状況が、面談時間を長くさせているのではないかと推測される。児童に「長い」「まだ終わらないのか」と思わせると、教育相談の効果は減少する。児童に心理的負担をかけず、話しやすく理解しやすい教育相談を心がけることで「相談してよかった」と感じさせ、「また相談しよう」という次の援助要請行動を促すことにつながると思われる。

教育相談で多くの児童が望む「解決方法の提示」、「守秘義務」に関連した項目で、9割を超える教員が気をつけていると答えたことから、教員が行っている教育相談の配慮は児童の思いにかなり沿っていると言える。児童アンケート問5「その他」の内容記述では、カウンセリング・マインドを基本としたほどよい距離間での傾聴、いじめ被害等に対する毅然とした指導、自力解決への支援とタイムリーな介入、相談しにくい児童に対するグループ面談などが求められていた。それらを実行するためには、さらなる児童理解と信頼関係づくりへの工夫や努力が必要であると考えられる。

総合考察

本研究の成果

研究1では、児童側から、担任に「相談しない」理由と援助要請しにくい原因が明らかになった。相談すればよいことは分かっているが、実際の援助要請行動に移れない児童の実態が示された。また、援助資源の選択には性差や学年差があることが明らかとなった。担任に相談しない理由としては、「自己理解や自己表現への自信のなさ」、「周囲とちがう行動をとることへの不安」、「担任に感じる相談しにくい雰囲気や態度」が挙げられ、教育相談においては、「相談することで解決の方法を見出すこと」、「相談していることや、その内容を周囲に知らせないこと」を望んでいることが示された。教員はこれらの児童の思いや発達段階を踏まえ、教育相談に当たらなければならない。学年が上がるにつれ自力解決を望む割合が高くなることから、何も対策をとらなければ援助要請行動は減少すると思われる。しかし、児童は教員による支援を望んでいないわけではない。児童の思いや発達段階に配慮し、児童がいつ、どのような支援を必要としているかを日々の観察や交流から見極め、児童の思いや考えを傾聴し、教員の考える解決方法への誘導ではなく、児童の中から解決方法を引き出すような教育相談であれば、児童から求められると考えられる。

研究2では、教員側からみた児童が援助要請しない原因と、教員が教育相談で配慮している点を明らかにすることができた。教員は「児童が担任に相談しない理由」をほぼ的確に捉えていた。多くの教員は日頃から児童をよく観察し、児童が話しやすい雰囲気や表情を意識するなど、カウンセリング・マインドをもって児童との人間関係を築こうと努力していることも明らかになった。しかし研究1で示されたように、実際に約3割の児童が教員に相談しにくい雰囲気や態度を感じ、解決に導こうとする教員の指導に不満をもつ児童もいることから、悩みを抱える児童の心情への配慮不足、傾聴の不十分さ、ティーチ（指導）とコーチ（支援）のバランス等の課題が明らかになってきた。これらの課題を解決するための具体的方策を以下に述べる。

具体的方策についての提言

集団へのはたらきかけ

新しい学級で人間関係がある程度できた5月に、教員に相談することの重要性や利点を感じさせる授業を行い、自己理解や自己表現力を向上させる社会的スキル教育を取り入れた授業を随時行う。

個へのはたらきかけ

校内研修を設けて教員の教育相談力向上を図り、各教員による日々の教育相談を通して、児童個々にはたらきかける。

今後の展望

1 校内研修の充実

本研究により明らかになった、児童の援助要請行動の実態と「担任に相談しない」理由、教員が行っている教育相談の実態等の課題を解決するために、「教育相談」に特化した校内研修の場を設ける必要がある。小学生の援助要請行動を対象とした研究は少なく、友人関係の悩みに焦点を絞った

本研究の調査結果は貴重なものである。また、「担任による教育相談」は各教員に任されているだけに、その実態や工夫・成功体験を共有する機会は多くない。そこで教員の教育相談力を向上させるためにこれらの資料を有効に活用し、児童の実態や教育相談の工夫について教員全体で話し合う場の設定が不可欠である。教育相談の力量は一朝一夕につくものではない。数年後に始まる大量退職を念頭に、50%を超える教員経験年数21年以上の教員がもつノウハウを全体で共有していくことも視野に入れる。暮会等を利用して成功事例について協議したり、コーチング練習を行ったりするミニ研修(月1回程度)をもつなど、教員の負担感に配慮しつつ継続的に取り組むことが大切である。

2 開発的教育相談の教育課程への位置づけ

本研究では集団へのはたらきかけとして、児童の援助要請を支援する特別活動の授業や、児童の自己理解や自己表現の向上のための社会的スキル教育を提言した。しかし、社会的スキル教育を効果的かつ継続的に行うには、事前のアセスメントや児童の実態に応じたプログラムの選定と、教育課程への位置づけが必要である。今後、教員全体の共通理解のもと、生徒指導部を中心として事前アセスメントやプログラム選定を行い、年間計画に組み込み、学校全体で実施していくことで、児童の援助要請行動と生きる力が段階的に伸びていくと思われる。

3 児童・保護者への周知

本研究の内容を、学校便りや授業参観・懇談会で児童・保護者に分かりやすく周知し、児童による援助要請行動の重要性を伝えることで、児童には担任に相談する意欲をもたせ、保護者にはわが子の援助要請行動を支援する姿勢を促す。周知の際には児童が「相談しよう」、保護者が「わが子に相談させよう」と思えるよう、担任は相談しやすい雰囲気や態度を心がけるとともに、学校全体としての教育相談体制を示す必要があると考えられる。

4 他校との連携

今回の調査対象校は町内の2中学校区から1校ずつとしたため、本研究の内容は、町内の他校においても身近で参考になるものと考えられる。町内小中学校では、既に社会的スキル教育を実践している学校もある。これらの学校と実態や取組を情報交換し、連携しながら具体的方策を実践することで、町内児童生徒の「問題に向き合う姿勢」と町全体の教育相談力の向上が期待される。

引用文献・ウェブサイト

- 後藤安代・廣岡秀一(2005). 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査研究 三重大学教育実践総合センター紀要, 25, 77-84.
- 神谷和宏(2007). 図解 先生のためのコーチングハンドブック 学校が変わる・学級が変わる魔法の仕掛け 明治図書出版
- 河村茂雄(2003). 教師のためのソーシャル・スキル 子どもとの人間関係を深める技術 誠信書房
- 文部科学省(2008). 小学校学習指導要領(平成20年3月告示)
- 佐藤美和・渡邊正樹(2013). 小学生の悩みとそれに対する援助要請行動の実態 東京学芸大学紀要・スポーツ科学系, 65, 181-190.